

令和元年度 第1回 津山市総合教育会議 議事録（要旨）

- 1 日 時 令和元年6月3日（月）午後3時00分～5時00分
- 2 場 所 市役所2階 第1委員会室
- 3 出席者 谷口市長、有本教育長、尾島委員、森委員、光岡委員
- 4 欠席者 長江委員
- 5 同席者 明楽総合企画部長、絹田学校教育部長、小坂田生涯学習部長、森上学校教育部次長、河原学校教育課長、廣野教育総務課参事、平田みらいビジョン戦略室長、山崎みらいビジョン戦略室主幹
- 6 会議日程 (1) 開 会
(2) 市長挨拶
(3) 議 題

「講話；自己肯定感を育て美意識を高める認知開発®手法について」
合同会社アースボイスプロジェクトCEO 榎田竜路 氏

- (4) その他
- (5) 閉 会

◆明楽総合企画部長

ただいまから、令和元年度第1回の津山市総合教育会議を開催させていただきます。皆様方には、大変お忙しいところをお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。本日の進行は、私、津山市総合企画部長の明楽が努めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

これより、着席して会を進めさせていただきます。

それでは、会議の開会にあたりまして、谷口市長からご挨拶をいただきたいと存じます。

◆谷口市長

皆さんこんにちは、大変暑くなってまいりました。そういった時節ではございますけれども、令和元年度の第1回の津山市総合教育会議を開催させていただきましたところ、ご多忙にも関わりませず、ご出席いただき誠にありがとうございます。

また、本日の会議には、合同会社アースボイスプロジェクトCEOの榎田様にご出席をいただいております、大変お忙しいところ誠にありがとうございます。きょうはどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、第2期の津山市教育振興基本計画も3年目を迎えるということでございまして、各分野におきまして様々な事業が展開されているところでございます。

教育機関、関係団体等との連携・協力のもと、一緒にいろいろと進めさせていただく中で、ハード部門では学習環境のICT化といった学校施設の充実ということで、前倒しで整備を進め、本年度、大規模改修を待つて整備する学校が完了しますと、一通り全校の環境が整うこととなります。また、ソフト面で申しますと、教師業務アシスト員を全校配置した上で、本年度、大規模校への加配、また、部活動指導員の配置もさせていただいているところでございます。また、リカレント教育を含めた生涯学習活動の推進、あるいは、スポーツイベントの誘致にしっかりと取り組ませていただいております。津山市の教育基本理念の実現に向けまして、津山の未来を見据えた人材育成に効果的に取り組んでいかなければならないと思っております。

特に私が申し上げているのは、就学前と小学生低学年に特化した取組をやっていく必要があるということ、小学校、中学校、幼稚園、保育園、こども園を視察させていただく中で、改めて感じたところございまして、そういったことにしっかりと取り組んでまいりたいと思っております。

先ほども申し上げましたけれども、本日は、榎田先生をお迎えさせていただいて、人材育成の観点から、ご教示をいただきながら、お話をさせていただきたいと思っております。

教育委員の皆様には、忌憚のないご意見をいただきながら、幅広い見地からご提言、アドバイスもいただきながら、この会を意義あるものとしてまいりたいと考えており

ますので、どうぞよろしく願いいたします。

◆明楽総合企画部長

ありがとうございました。

それでは、ここで、本日までご出席の皆様から自己紹介をお願いしたいと存じます。

尾島教育委員からお願いします。

【自己紹介】

◆明楽総合企画部長

ありがとうございました。

なお、本日は、ご都合により、長江委員がご欠席でございますので、ご報告させていただきます。

それでは、議題へ移らせていただきますが、その前に、本日、ご出席をいただいております、榎田竜路先生のご紹介を、私のほうからさせていただきます。

榎田先生におかれましては、アースボイスプロジェクトCEO、復興支援メディア隊代表、NPO法人映像情報士協会理事長などの要職をお勤めのほか、秋田大学大学院で教鞭をとっておられます。また、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の「経済・テクノロジー」専門委員会委員としてもご活躍中でございます。

近年は中高生の人材育成にも力を注がれ、全国各地の学校で指導にあたっておられます。

本市でも平成28年度から、津山東高校で地域企業を紹介する動画制作の講座をお願いしているところでございます。普段、全国をかけ回っておられまして、大変ご多忙中のところ、本日は本市の総合教育会議にご出席をいただき、お話をいただけるということでございます。

それでは、ここからの議事進行を津山市総合教育会議運営要綱の規定に基づき、谷口市長をお願いいたします。

谷口市長、よろしく願いいたします。

◆谷口市長

失礼します。

それでは、ここから私が議事の進行を務めさせていただきます。

それでは、「自己肯定感を育て美意識を高める認知開発®手法について」と題しまして、お話をいただきます。

先生、よろしく願いいたします。

◆榎田竜路氏

皆さん初めまして、榎田と申します。

きょうは、この表題に合わせた話をするわけですが、「自己肯定感」というものはいろんなところで言われていますが、「美意識」ということは、日本人はあまり考えないところがありまして、そのあたりをなるべくわかりやすくお話ししようと思います。

お手元の資料は、私の考えていることを簡単にまとめたものです。

それから、きょうは聞きなれない身体教育というお話が出てきますけれども、非常に重要な概念ですので、理解していただきたいと思います。

先ほどご紹介いただきましたが、簡単に言いますと私の専門は3つありまして、一つは芸術家として音楽をやっています。もう一つは映画の技術の研究、皆さんもご承知のとおり、映画というのは人間のコミュニケーションの最先端のものをつくることでもあります。

どこに行ってもそうなんですが、オリパラの「経済・テクノロジー」専門委員会でも最初に話題になったのが、日本人の生産性の低さ、生産性にはいろいろな考え方があると思いますけれども、去年のデータで申し上げますと、OECD加盟36カ国中20位、G7中では最下位です。世界競争力は30位、去年は25位でしたので、1年で5ランク落ちたことになります。

簡単に言いますと、働けど働けどわが暮らし楽にならず、ということです。

生産性はなぜ上がらないのかということですが、その会議では私以外は大企業の重役の方たちばかり、要するにグローバル経済を相手にしている方たちですので、地方のことはあまり眼中にないのではないかと思います。しかしながら、エンジンはグローバル経済とローカル経済を比べると、日本はローカルエンジンのほうが圧倒的に多いので、この部分を頑張らないとなかなか前に進まない。では、なぜローカル経済、地方から人がどんどん出て行ってしまうのか、学校で言うとなかなか学力が上がらないとか、学力を上げて何か意味があるのかとか、いろいろな話があると思いますが、私はたった一つの理由が原因だということをつかむことができました。

それを端的に表しているデータがありまして、人材評価は世界第4位、経営者ではなく労働者の評価ですけども、これはG7中では断トツの1位です。日本より上位の3か国については、小国で日本とは比べられない国ということで、実質世界1位ということです。そのほか、特許数も世界1位だそうです。人は優れている、特許数も多い、なぜ生産性が上がらないのかと思いませんか。いろいろ調べてみると非常に憂慮するデータがありまして、今からお見せするデータがなぜそんなに低いのか、その理由が自己肯定感ということです。機敏性、これは63か国中第57位、30位以下の先進国はありません。これは何かと申しますと、例えば新しい考え、新しいアイデア、イノベティブなこと、使えばよくなる技術などをすぐに取り入れるということです。

これは、日本の経営者のレベルがあまりにも低すぎる、特に中小企業では、ということですが。

機敏性というのは、これいいな、よしやろう、ということです。教育でもそうです。しかし、総すくみになっていて身動きが取れない状態になっているのが今の日本だと私は思っています。この機敏性を高めない限りは、結局、競争力は上がりません。

簡単に言うと、津山のまちでクレジットカードが使える飲食店はどれくらいありますか、電子マネーは、ということです。それが使えないのにインバウンドを呼びたいですと言われても、大変難しいですよ。洋式トイレがないとか、そういったことが結構あります。そういったことを考えずにやっている。つまり、こういうことが、機敏性が低いということです。機敏性が高ければ早急に対応されるはずですよ。

ではそういう意識はなぜそうになってしまうのかということがすごく不思議で、いろいろ調べてみました。

ではどんな人材がいれば生産性が上がるのか。生産性というのは、私の定義では少し違って、生産性というのは、普通は「効率」と捉えます。経済学でも経営学でも「効率」なんですが、「効率」というのは、もっと言ってしまえばコストとスピードの2つになります。より安くより早く作れる、20世紀はそれでよかったのですが、インターネットが普及し、いろんな細かい価値がお金を産むようになってきたときに、コストを下げますといっても限度がありますし、スピードを上げるといったときに、この間面白い話がありまして、経済産業省のAIとIoTで地域活性化するという委員会がありまして、私はAIやIoTの専門家ではないですけども構成員になっておりまして、北九州市の方がいられておりまして、御餅屋の職人が高齢化によっていなくなってしまって若旦那が困っていると、そこで経産省の補助金を使ってAIの餅をつくる機械を導入したと、熟練した職人が7秒に1個の餅をつくることを、そのAIを活用したロボットでは1秒に1個つくることのできることで、生産性が上がりましたというわけです。この時に、簡単に言うと生産性が7倍向上したということですかと質問すると、すごく単純に言うとそういうことだと回答がありました。そうするとどうなるんですかとお尋ねすると、コストを下げることでいいということでしたので、コストが下がるということは値段が下がるということですかと尋ねると、そうですという返答でした。それは原理的に言うと最低7分の1まで値段を下げることでいいということですかとお尋ねすると、そうなりますと回答がありました。元の売り上げを上げようと思ったら今までの7倍の量売らなければなりませんよねと言った瞬間に静まり返ってしまいました。これがデフレスパイラルの根源ではないでしょうか。

AIは使ってもいいんですけど、この職人さんの手は魔法の手ですということをしつかりと伝える、これをブランディングと言いますけれども、付加価値を付ければ、70円の餅が140円でも売れるようになります。なぜ、その方向を考えないのか、

このほうがむしろ効率は上がります。手間は同じでも、ブランディングすればお客様は来る、高くても売れるという状態が起こるわけです。そういうことを考える人を私は育てたいと思って、その仕組みをつくりました。

調べてみると、イギリス政府では生産性を上げるために何が必要か、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学に調べさせた結果、第1位がアントレプレナーリズムです。アントレプレナーリズムとは、日本語に訳すと起業家精神ということです。

社員教育と生産性の相関係数は、61パーセントしかありませんが、この原因はほとんど社長にあります。なぜなら研修を受けてきた社員の意見を取り入れないからです。機敏性が低いということです。いい話を聞いてきた社員が増えるだけでそれが会社に活かされていない。技術革新は56パーセント、競争に至っては全く意味がなく0.05パーセント、過剰な競争が起こればデフレスパイラルに陥ってしまうからです。

結局何が言いたいかというと、アントレプレナーを育てるしかないということです。

アントレプレナーとはどういう人かということ、国連が定義しています。国連の定義で言うと、市場に変化と成長を起こすような新しい発想の創出、普及、適用を促す人、チャンスを探ってそれに向かって冒険的にリスクを取る人。こんな人が周りにいますか。教師にいますか。

どんどん正しい教育方法を取り入れている国はたくさんあります。日本だけがウン十年前のやり方をやっていて、右往左往している感じです。

このアントレプレナーという言葉を私の言葉で言うと、認知開発力の高い人材とっています。

認知開発手法というのは、随分と前につくって日々進化させてやっているところで、津山東高校でも生徒たちがどんどん進化してくれます。

認知開発力というのは、アントレプレナーと似ています。物事の中にある新しい関係性を見出して、それを価値化していく、普及、展開させていく力、この力がどうやったら育つかということを考えてんです。

中国とか日本以外の国では、美意識を高めれば何とかあります。ところが日本はそうはいかないんです。価値を生む源泉というのは結局美意識なんです。皆さんお分かりだと思いますが、美意識というのは、価値を感じる意識のことです。分かりやすく言うと「真・善・美」、何があなたにとって真実ですか、何があなたにとって善きものなのか、何があなたにとって美しい、つまり、おいしいでも楽しいでもいいです。

こういった美意識が高い人が昔はたくさんいたんですけれども、どうしようもありません。美意識が高ければ街並みもきれいになります。市役所が働きかけなくても、街並み自体が観光客を呼ぶように美しくなります。ごみも捨てません。子供を虐待したりしません。美意識というのはすごく大事なことです。

ところが美意識というと、デザイナーですね、アーティストですねと、自分と関係

のない話になってしまいます。皆さん方の生き様のようなものはすべて美意識が支えています。私たちは、美意識というものを研究し開発して、それを生徒たちに教えなければならぬのですが、私の場合は、映画をつくる、メディアをつくる、CMをつくる、情報をつくるという専門の大学生相手にやっていたので、特に美意識について語る必要がなかったわけです。なぜなら美意識が高いから。それをどう伸ばしてどのようなデザインにしていくかというところで、本人たちが気づかないようなところに気づかせるというのが教育です。

日本の場合はどうなっているかということ、美意識以前の問題で、簡単に言うと自己肯定感が低いので美意識が発揮できていない。自己肯定感というのは、なんとなく自分が好き、この「なんとなく」が大事で、はっきりではないんです。なんとなく自分が好き、なんとなく自分に価値があるような気がする、なんとなく自分ができるような感じがする、この「なんとなく」の部分形成するのは、基本的には親の役目です。これは言葉の教育だけでは実際は無理なんです。

日本全国で、自己肯定感が低いんです、どうしたらいいでしょうかと聞かれます。自己肯定感を高めるために何をしていますかとお尋ねすると、褒めていますと答えられます。褒めないよりは褒めたほうがいいのですが、そういうものではありません。脳の構造がそうになってはいないんです。

私は今、大企業から中小企業まで、いろいろな会社の社長や管理職、人事担当から相談を受けています。どう言われるかということ、「最近の若者は」とよく言われます。私としてはバイアスがかかっていると思っていましたが、実際に変化が起こっているようで、注意すると会社に来なくなる、常にこちらが大丈夫だろうかと気を使わなければならないような若者たちしか入社してこない。

二重システム理論というものがあります。自己肯定感はどこに宿っているのか、どうやったら高まるのかと考えました。二重システム理論を簡単に言うと、脳というのは考える脳と感じる脳の二つのシステムがありますよね、という感じです。本当はわかれていなくて連携しているんですけど、便宜上分けて考えるというのが二重システム理論です。

システム1というのが感じる脳、システム2が考える脳、二重システム理論を分かりやすく図に表すとシステム1の上にシステム2があると考えてください。

学校のテストを見れば、その学校がどのような教育をやっているのかが分かります。理性的に、論理的に、科学的に考えることは非常に大事なことはありませんが、システム1のところにも美意識も自己肯定感もあるんです。システム1がちゃんと育っていないとシステム2が上に乗りますかね。

いろんな中学校に行かせてもらいますが、ある先生に話を聞くと、女子はそうでもないけれど、男子の平均点が異常に低い、一人や二人ならわかるけれども平均点が38点というのは私の長い教師生活の中で初めてのことでというお話をされた先生が

いました。今、どうしているんですかとお尋ねすると、街から塾の講師を呼んで補講していますとおっしゃっていました。このやり方の発想は何かといいますと、マイナスをプラスにしようという発想です。教育に関しては、この発想を止めなければいけません。マイナスがプラスになるということはありません。マイナスはマイナスのままです。その代りにプラス側を伸ばすしかない。そうすることで、マイナスもプラス側に伸びてくるというやり方です。

その先生に成績は上がったんですかとお伺いすると、一向に上がりませんということでした。つまり、システム1がしっかりしていないと、その上のシステム2は載らないんじゃないですかというお話をさせていただきました。

私はシステム1を育てる方法を開発しているんですが、システム1は人間の感情の部分、つまり本体ですけれども、システム1だけでは9割はうまくいくけれども残りの1割は系統的なエラーを起こすと言われていています。例えばですが、同じような男性に騙され続ける女性がいるとします。周りから注意されても、今度は違うからと言って、結局騙されてしまう、これがエラーです。

システム1には「好み」というものもあります。システム1はバイアスが形成されるところで、「好み」というのはある種の確証バイアスです。

西洋の考え方は、システム1だけではエラーを起こすからシステム2もちゃんとやろうよという考え方で、これは正しいことで、直感で全部のことはできませんので、システム2で補完しましょうということです。

ところが今どうなっているかというと、人間のシステム2自体が信用できないからAIでやってしまおうという流れになっています。そうすると何が起こるか、最終的にどうなってしまうかというと、システム2のAIが出した選択肢の中から人間のシステム1で答えを選ぶようになります。これをAIに選ばせる場合、自動運転などの交通システムはいいですけれども、人間の生き方、どう生きるかとかを機械に任せるとどうなるかというと、おそらく津山から若者が一人もいなくなります。

あなたは津山を出ていきなさい、大阪に行ったほうが良いという話になってしまう。

自己肯定感とは何かということですが、日本人には自己肯定感を育てる文化があったわけですが、自己肯定感を高めるための文化ではないのですが、結果的に自己肯定感を高めることになった。

「躰と対話」が教育の基本にあったわけですが、躰と言っても体罰のようなものではありません。「躰」という字は、どう書きますか。「身」が「美しい」と書きます。「身」が「美しい」とはどういうことでしょうか。躰とは行儀よくさせることです。行儀がいい、行儀が悪いと言いますが、行儀とはなんでしょうか。

どうして自己肯定感が低いのかというと、自己肯定感というのは根拠のない不安であって、根拠のある不安は、はっきりした不安なんです。なんとなく大丈夫という状態にするのが躰なんですけれども、どうやったら躰けられるかというと、体を一つに

して使うことができるのが行儀、寄りかかってはいけない、寄りかからない身体、寄りかからない動作、寄りかからない所作、寄りかからない感覚というのを身に着けさせるのが躰だったわけです。寄りかからないという感覚が自分の中で完成しているという状態をつくるのが、結局自己肯定感を高めることにつながっていくわけです。

褒めて高めるなどもありますが、それよりも身体の使い方、つまり躰をしなければなりません。座り方、立ち方、歩き方、身体の使い方を全部教えたらず自己肯定感が高まります。

【映像資料を紹介】

何をやっているかということ、躰と対話です。

対話とは何かということ、相手の意見を聞いたら自分の意見が変わるということです、これが対話です。より良いものをつくっていくためには、自分の意見を変える必要もあるし、自分の意見で相手も変わるという状況を子どものころから作っているんです。

どうするかということ、意見を言ったら絶対に否定しない。受け入れられないものに関しては、否定するのではなくて保留ということをする。

【映像資料を紹介】

例えば、皆さんが定年退職するとき、職員全員が泣いてくれるかどうか、これが対話の力です。

幼稚園、小学校、中学校まで、軸が通った集団をつくれればすごい津山が作れると思います。

特別活動には躰の部分もしっかりあって、例えば給食当番があります、小さな1年生が汁物を器に入れるのは大変です。猫背のままでは入れられない、自然に姿勢がよくなります。それから、掃除当番、道具を使う、重いものを運ぶ、合理的に体を使わなければきつから自然に自分の体がちゃんと使えるようになってきます。

我々の体は、もともと全力発揮できない状態で生まれてきています。全力発揮できないとどうなるかということ不安になってしまいます。

不安になってしまうから、全力発揮できるような身体にしていこうという歴史が何万年もあって、その頂点に日本文化があったわけです。武道です。道と名の付くものは全部そうです。全力発揮するための手段なんです。

皆さんが普段聞きなれない言葉は身体の使い方、そしてもう一つ、7万年前に認知革命がホモサピエンスだけに起こります。認知革命とは何かということ、コミュニケーションが変わったということです。心当たりがあると思いますが、物語が理解できるようになったということです。

共同主観とは、例えば、日本人というのも共同主観、資本主義、共産主義、これも共同主観です。つまり、物語です、その物語を我々は共有して何ができたかという集団を形成するという事です。

共同主観をつくるということはすごく大事で、市長だけではなく、みんなで作っていかなければならない。共同主観をつくったら学校もよくなる。

共同主観を持たない集団というのは、動物もうそうですけど250くらいの個体が限度だそうです。

我々は、共同主観を持つことによって何万、何十万、何百万、何億という形につながっています。

進化というのは、一人で考えられないことを集団で考えることで、対話する力がすごく大事になってきます。

しかし、対話する力が弱くなっています。日本人は異常に読解力が低い。官僚の中にも指示代名詞がどこにあるかわからない人がたくさんいます。なぜかという、日本のテストが選択問題だからです。キーワードで暗記し、文脈で理解しない。文脈というのは物語の命です。

【映像資料を紹介】

工場見学、会社見学ではだめなんです。取材して、取材したものを構造分析して、構造分析したものの中から自分なりにテーマを決めて、そしてストーリーをつくる。この過程が物語をつくる基礎体力になっていく。一番重要なのは、この講座を受けると子どもたちの自己肯定感が高まっていくんです。

私たちが日ごろ何気なく使っている言葉は、脳と体に大きく影響しているんです。例えば脳は主語を理解できない。今言っている脳は先ほどのシステム1です。感情が発生するところ、常同行動をつかさどる脳の部分、大きく分けてシステム1の部分です。理性ではないところ。

システム1は主語が理解できないので、自分が発した言葉はすべて自分がしたことと捉えます。ここでいう脳は古い脳、つまりシステム1です。理性の脳であるシステム2は主語も時間も理解できるけれども、システム1はできない。

例えば、「馬鹿野郎！」と誰かに叫んだ後、気分が悪くなる時があると思います。システム2では、誰が誰に対して言っているか理解できているけれども、システム1のほうは、主語が理解できていない「馬鹿野郎！」という感覚だけが発生している状態で、その方向がない。つまり、人に言われているのと同じ状態なわけです。

自己肯定感と何の関係あるかというと、企業に取材に行った高校生たちは、取材先の会社で「すごい」をたくさん感じてきます。

システム2では、会社が「すごい」と理解できていますが、システム1では、その

発生した「すごい」という感覚が自分に向かっているわけです。

【映像資料を紹介】

タイガー・ウッズは、ここ一番の勝負の時、相手がパットを入れたら負けるという時に、「どうか入りますように」と願うらしいです。

私たちは、例えば野球のひいきのチームが負けそうになったら、相手チームに「三振しろ」とか思ってしまいがちだと思います。絶対にやめたほうがいいです。そうしないと自分の自己肯定感が高まらないから。

最後に面白い言葉を紹介すると、中国に精華大学という大学がありますが、その美術学部長から教えてもらったんですが、「厚德載物」、厚い徳の上にしか物は載らない。つまり、しっかりしたシステム1の上にしかシステム2は載らないということです。

徳をシステム1と読み替える、ではどうやってシステム1を活性化させるか。システム1が活性化したら後が楽です。勉強しろと言わなくてもよくなる。

何か質問等があればいつでもご連絡をください。私からの話は以上です。

◆谷口市長

ありがとうございました。

皆様から何かご質問があればお願いします。

◆尾島委員

きょうはありがとうございました。

最初に、自己肯定感を育てるというテーマを見たときに、美意識を高める、格好よさ、そういったことだろうかと思いました。

お話を聞いてみると、私も教師をやっておりましたので、先生の言われる自己肯定感というものは本当に必要だと思います。

学力テストにおいても、無回答の欄が目立ちます。分からなくても何か回答を書こうとする、3点でも上げる努力をすることができない現状を思うと、自己肯定感を高める取組が必要だと感じました。

先生がおっしゃられた「躰と対話」についても、具体的にどうしていけばよいのか、自分の中で回答がパッと出てこないわけで、先生の話の10%か15%しか理解できていないような気がしています。

本日の先生の話を取り返りながら、「躰と対話」というのは「個人と集団」といったキーワードをもう少し勉強して自分自身を高めていけたらと思っています。

◆森委員

先生の姿勢の話を伺って、本当に最近は正座をしなくなったと感じています。座禅をすると背筋がピッと伸びて、考え方にもひらめきのようなものがあるんじゃないかと思って、改めて正座の良さ、腰を伸ばすこと、子どもたちの姿勢を改善していくことが必要なんじゃないかと思われました。

それから、先生が言われた「軸」というものをどのようにして幼・保・小・中・高と作り上げていけばよいのかなと思いました。

◆榎田竜路氏

鹿児島薩摩藩の郷中教育という教育制度をご存知でしょうか。これは非常に特徴があって、15歳までの若者が「稚児」、15歳から「二才」というグループがあって、青少年の社会教育の場として大人が介在しない、先生に大人がいないんです。自分の先輩が教えます。西郷隆盛や大久保利通などは、この先生役を結構長く任された人たちだったようです。

何が言いたいかというと、自分が15歳になったときに、2～3歳の時に遊んでくれたお兄さんがその「二才」の中にいる。つまり、ずっとつながっていることになります。これを私は「相互認知容易性」と呼んでいるんですけど、お互いよく知っているという状況をどうやって地域につくるかがすごく大事なんです。その基本が、さっき見ていただいた武分方小学校の縦割り班で、あれを見たときに「これは郷中制度だ」と思ったわけです。

この学校は、学校で起こるほとんどの問題を6年生だけで解決できるそうです。すごいと思いました。

自分が30歳になったときには、15歳から45歳までがずっとつながった集団になるわけです。

学校は横割りになっていますし、社会に出ると縦割りで、結局、方眼紙の個になってしまうわけです。

これを学校教育の中でしっかりと縦をつくっていくと、例えば、市長がこういったことがやりたいと言ったときに、機敏性が低いとみんなが総すくみになってしまい、結局遅れてしまうわけです。ところが、軸がしっかりできていれば、こういうことをやりましようと言ったときに、じゃあやりましようとなり、動きが速いわけです。その代り、やりましようと言ったことがいいこと、正しいことかどうか判断することがリーダーには必要になるので、そのことを自覚しておかなければなりません。これがリーダーシップ教育なんですよ。

私が言った軸というのは、そういうことなんです。ですから、先ほど言いましたように、高校生が中学生を教える、中学生が小学生を教えるといった形ができてくると軸というものができてくるのではないかと思います。

◆森委員

先生が言われたように、児童生徒たちがとてもいい顔をしていただのが印象的でした。

◆榎田竜路氏

手遅れになる前に、自己肯定感を高める。自己肯定感が高まれば、美意識は勝手に発達します。それが本能だからです。

面白いことをやっていたらまちが活性化します。私は鎌倉に住んでいますが、鎌倉には面白いこと、楽しいことをやる人が移住してくるんです。そうするとまちが面白く、楽しくなるわけです。小学校のときから面白くて楽しくておしゃれなまちがたくさんあるので、みんなが鎌倉のことを大好きになっていくわけです。

私は、津山というところはすごいところだと思っています。こんな狭い範囲でこんなに高いレベルの食事を出すところは見たことがありません。東京でも、高いお金さえ出せばあるでしょうが、費用対効果を考えれば、津山は非常に高いです。おしゃれな場所も結構あります。

楽しくて面白い、自由な発想をする人が増えれば、お金を生み出すようになります。お金を生み出すようになれば、生まれ育ったまちから離れないようになります。出て行って勉強する、海外に行ってもいいから、戻ってきてくれたらいい。戻ってこなくても津山とかかわって仕事をしてほしい。

まず、このまちで暮らす、出て行ってしまったけれども戻ってくる、戻ってこないけれどもかかわる。この3層構造にしないと豊かなまちにならない。

◆光岡委員

自己肯定感を高めるためには、身体の使い方、姿勢の問題であったり、躰けと対話というお話をお伺いし、動画でもご紹介いただいた訳ですけども、津山市の小学校でも縦割り班の取組をしていますが、式分方小学校のようにより強力な取組を進めることができれば、地域のことをより好きになったり、自己肯定感が高まることにつながっていけば素晴らしいことだなと思います。

◆榎田竜路氏

文部科学省の特別活動に対する意識が低いと感じます。特別活動は数値化できない。姿勢と学力の相関関係も体験的にはありそうな感じがするが、姿勢には点がつけられないから難しい。しかし、感覚的には、教育現場にいる方々は、姿勢と学力は関係あると思うはずだから、どう取り組むか考えていけたらいいかなと思います。

◆谷口市長

まだまだお話を伺いたいところではございますが、そろそろ予定していた時間がきたようでございます。本当にありがとうございました。

私も一言だけ、津山という共同主観をしっかり作ってまいりたいと思いますのでまたご指導をよろしくお願いいたします。

また、明日は校園長会議でご講演いただくということでお世話になりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日の議題は以上でございますので、ここで事務局にお返しいたします。

◆明楽総合企画部長

ありがとうございました。

それでは、「その他」でございますが、皆様から何かございますか。

(なし)

◆明楽総合企画部長

以上をもちまして、令和元年度第1回目の津山市総合教育会議を閉会いたします。閉会にあたり、有本教育長からご挨拶をお願いいたします。

◆有本教育長

榎田先生、今日は興味深いお話を聞かせていただき、大変ありがとうございました。

本市の子供たちの自己肯定感ですが、全国調査によると、特に中学生が全国・県の平均を大きく下回っています。

どうせ僕にはできないとか、どうせ僕は役に立たないとか、極端に言えばそういう子供たちをもう少し、いやいや役に立つんだという子供たちに育てていきたいというのが私の思い出でございます。

是非、明日の校園長会議でもよろしくお願いいたします。津山の教育が元気になっていけばいいなと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

今日はありがとうございました。